

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

Sign language saves hearing parents with deaf children.

伊藤 泰子[†]
Yasuko Ito

Abstract: Many hearing parents with deaf children compel their deaf children to learn their spoken language such as Japanese language because hearing parents would like to pull their children into Hearing Society. Instead of their deaf children's making efforts to lip-reading and pronouncing spoken languages, they can't be complete spoken language communicators. If hearing parents were willing to learn sign languages, they must be able to understand their deaf children. What hearing parents have to do first of all is to join sign language communicators with their deaf children. Sign language may be instructed to hearing parents by deaf children.

1. はじめに

タイトルの「聞こえない子ども」とは、生まれた時から聞こえない子ども（ろう児と呼ばれる 100dB 程度）を示すことにする。耳が聞こえない状態には大きな幅がある。数値で聴力をデシベル(dB)で表し、普通に聞こえる聴力を 0 デシベルとして、聞こえない程度に従って数値が増える。聞こえない程度を分けて、中度難聴、高度難聴と呼ぶ。ここで考える「聞こえない子ども」は 100 dB の全く音を聞いた経験を持たない（しかし、振動は感じる）生まれつきの高度難聴の子どもとする。

聞こえない子どもの多くは病院で生まれ、最近では生まれた時に行われる検査（脳波による聴力検査）で「聞こえない子ども」と診断が下される。この時点から「聞こえる子ども」と「聞こえない子ども」に分類される。また、聞こえない子どもの親も「聞こえる親」と「聞こえない親」がいる。一般的に子どもが生まれると親は我が子が親と暮らすことによって、自然に、親と同じ言語を身につけると思う。日本語を話す親は子どもが日本語を使う日本人であると考えるのは当たり前のことで、家族が同じ言葉で類似した考え方をするようになるものと思うでしょう。そして、子どもは年齢と共に言語が発達して親の言語を主に親とのやり取りの中で自然に覚えていき、音声言語（話し言葉）を習得する。子どもは声を出して発音の仕方を訓練して、まずは「話し言葉」を身につける。

このように、親から子どもへ親の言葉が継承される。そして、親子は共通の言葉の音声言語を使ってコミュニケーションして親子関係を築く。これが子どもにとって根本的な最初の人間関係となる。共通の言葉によって親子の絆は生まれる。このようなことは、考えるまでもないような常識と言えるだろう。

ところが、聞こえない子どもが生まれると、聞こえないから親の言葉を聞いて繰り返し真似をして覚えることが難しいから親と同じ言葉を我が子は身につけることがむずかしいと気付く。親とのやり取りの中で聞こえない子どもが自然に、親の音声言語を身につけることはむずかしいと気付く。一般の子どもへの常識が当てはまらないことになる。

2. 常識的な見方・考え方を考える

前記の「一般的に子どもが生まれる」という場合は、聞こえる親に聞こえる子どもが生まれた場合である。親子のパターンはその他に 3 通り考えられる。2 つ目は聞こえる親に聞こえない子どもが生まれる、3 つ目は聞こえない親に聞こえる子どもが生まれる、4 つ目は聞こえない親に聞こえない子どもが生まれる場合がある。4 つの親子のパターンに「親子は共通の言葉でコミュニケーションして親子関係を築く」という常識を照らし合わせてみる。2 つ目の [聞こえる親—聞こえない子ども] は、親の音声言語を共通の言葉とすることはむずかしい。3 つ目の [聞こえない親—聞こえる子ども] は親の言語を継承するとしたら、手話でコミュニケーションする聞こ

[†] 基礎教育センター 非常勤講師

えない親は、手話を聞こえる子どもとの共通の言葉にすることができる。聞こえる子どもは親と暮らす中で手話を身につけることは可能なことだ。4つ目の「聞こえない親—聞こえない子ども」は親子が同じ言語(=手話)を共通の言葉とすることができる。以上から見ると、聞こえる親に聞こえない子どもが生まれた時にのみ、親子の共通の言葉がないことが問題であることになる。

聞こえる親と子ども	聞こえない親と子ども
親子 A [聞こえる親 — 聞こえる子ども]	親子 C [聞こえない親 — 聞こえる子ども]
親子 D [聞こえる親 — 聞こえない子ども]	親子 B [聞こえない親 — 聞こえない子ども]

図1 親子の関係

図1に親子の関係をまとめてみる。まず、聞こえる人の母語(第一言語)は音声言語である。そして、聞こえない人の母語は手話としてみる。人間は本能として、親子は一緒にいることが当然であると思う。一緒にいることで、子どもは親子の絆を作る共通の言葉(=母語と呼ばれるストレスを感じないで自分の心を表し、伝えあえる言葉)を自然に覚えていくことも本能として誰にでも備わっていると思っている。図の親子A[聞こえる親の聞こえる子ども]は耳を使う音声言語を母語として親と一緒にいることで自然に身につけ、聞こえる人の世界に根付く。親子B[聞こえない親の聞こえない子ども]も、手話を親と一緒にいることで自然に身につけ、手話を母語とする聞こえない人の世界に根付く。親子C[聞こえない親の聞こえる子ども]は聞こえない親と一緒にいることで手話を母語とすることができる。そして、さらに、この聞こえる子どもは聞こえる人の世界で音声言語も身につけることができる。

最後に親子D[聞こえる親の聞こえない子ども]は本能的に親と一緒にいることで母語を身につけることができない。聞こえる親の本能は一緒に子どもといることが当然であるので、聞こえない子どもを聞こえる人の世界に引っ張り込むと、そこでは聞こえない子どもは手話も音声言語も自然に身につけることができないので、この聞こえない子どもは母語をもたない根なしの存在になってしまう。

この聞こえない子どもは聞こえる人の世界で、ストレスを感じないで無意識に自分の心を表し、伝え合うことは難しい。たとえば、言葉がないと感情を表せない。うれしい、悲しいという言葉がなかったら自分の心を表せない。そのとき、人間はストレスを感じるだろう。聞こえる親は自分の聞こえない子どもを無意識に自分の心を表して伝え合える母語をもたない子にしてしまうと、親

子が一緒にいてもコミュニケーションできず、さらには親子の絆も生まれない。このような状況を聞こえる親は望むはずがない。

では、この聞こえない子どもが本能的に自然に母語を持つためにはどうすればよいか。答えは親が聞こえない人の世界に入り、子どもと共に手話を覚えようとする事だ。それによって聞こえない子どもは本能的に自然に手話を母語として覚え、そして、親も手話を覚えていけば親子は一緒にいて手話で親子の絆を築くことができる。親は手話を覚えることに苦労するだろうが、聞こえない子どもは聞こえない人の世界で本能的に自然に手話を覚えて聞こえない人の世界に根付くことができる。どんな子どもでも母語をもつことで自分自身の基盤ができる。母語はお互いの心を通わす言葉だ。その言葉で伝え合うことで、自分の存在を確認できる。言いかえると自分のアイデンティティを持つことができる。聞こえない子どもも自分の基盤となる母語を本能的に自然に持つことができるようにすることが、親が第一にすべきことだ。

このように、聞こえる親に聞こえない子どもが生まれる親子Dの場合、聞こえない子どもは音声言語を身につけることがむずかしい。だから、親子で十分なコミュニケーションができないと考える。そして、聞こえない子どもは、親からの特別な支援を必要とするかわいそうな聴覚障害児として見られることになる。そのため、聞こえない子どもは不十分な不完全なコミュニケーションしかできないなら、聞こえる子どもに近づくように努力しなければいけないと親は考えるであろう。子どもが聴覚障害児として話し言葉をできるだけ使えるようにするために、親は補聴器を与える、人工内耳手術を受けさせることによって、少しでも聴力を「回復」させようとするだろう。また、口話法指導(相手の発音する口の形を見て言葉を判断する)や文字習得指導(音声ではなく文字でコミュニケーションできるようにする)を奨励して、聞こえる人とコミュニケーションができるようになることを望み、学校も聾学校ではなく、普通学級に所属させて、聞こえる子どもとコミュニケーションする機会を多くして、不完全なコミュニケーションを少しでも何とかしようと多くの親は努力することになるだろう。

親の努力と同時に本人の子どもも努力するように求められる。補聴器を使うことになっても何度も補聴器のフィッティングをし続けなければならない。また、補聴器も5年ほどで買い換えなければならないので、そのたびにフィッティングから始まり、さまざまな故障やトラブルにも対応しなければならない。

人工内耳については補聴器よりもさらに、子どもの努力を必要とするだろう。人工内耳手術を受けてから音入

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

れ（マッピング）をして、それで終わりではない。そこから音を習得する訓練の始まりだ。人工内耳については補聴器のように「もうやめた！」と言って簡単に人工内耳の装用をやめることができない。

口話法指導も人の口を見て言葉を判断することは一般的に考えても簡単なことではないと思われる。普通学級で他人に配慮できるような年齢ではない子どもたちの中で、補聴器や人工内耳で得る聴力をめいっぱい使って、口を読んで（何を相手は言っているのかを口の形から判断する）、同年齢の子どもたちの仲間入りをするのは並大抵の努力ではむずかしいであろう。

現代社会では聴覚障害者支援として補聴器や人工内耳以外にも、字幕¹⁾をつける、要約筆記²⁾をしてもらうなどの人的支援も受けられるようになってきている。そのため、文字の読み書きの力をできるだけ早くから十分につけていくことが必要と思われる。ところが、聞こえる子どもは音声言語を土台にしてその上に、文字を習得するのに対して、聞こえない子どもは、聞こえる子どもと同様な方法で文字を習得することはむずかしいので大変な努力を必要とされることになる。このように、聞こえない子どもは努力をし続けて、将来、聞こえる人の社会で生活できるようになることを目標とする。自分が不完全なコミュニケーションしかできない障害者であると感じさせられながら、聞こえる人との音声言語でのコミュニケーションができるようになろうと努力するであろう。しかし、彼らは努力をし続けても、いつまでたっても支援なしでは自信を持って1人で完全なコミュニケーションができることはないだろう。なぜなら、音声言語のネイティブスピーカーにはなれないからである。聞こえる子どもは、母語である音声言語を無意識に自由自在に使ってコミュニケーションするが、聞こえない子どもは、聞いたことのない音声言語を努力して習得しても、音声言語を無意識に自由自在に使う音声言語のネイティブにはなれない。しかし、彼らは手話のネイティブになることができる。聞こえない子どもは音声言語の代わりに、手話を母語とすることができる。母語となる手話の芽を体に備えている。その芽を育てれば手話という母語を持つことができる。

以上の聞こえない子どもに対する考え方は常識的考え方が基盤にある。①親子は同じ音声言語を使う。②無意識に自由自在に使えるようになる母語は自然に身に付く。③第一言語（母語）は親から子どもへ継承する。④母語の音声言語でコミュニケーションして人間関係を築く。これら4つの常識的考えが基盤にあると考えられる。

3. Aレーン（音声言語）とBレーン（手話）

筆者は聞こえない子どもに対する見方は上記の常識的な考え方を基盤とする見方（Aレーンと呼ぶことにする）と、もうひとつ別な見方（Bレーンと呼ぶことにする）があると考ええる。多くの親は常識的なAレーンの見方のみしか見えないのではないかと思われる。Aレーンとは、親子は音声言語でコミュニケーションする。聞こえない子どもの母語は音声言語であり、音声言語でコミュニケーションして人間関係を築くとする考え方の道を意味する。

Aレーンは親が聞こえない子どもを親が使う音声言語の世界にとけ込めさせることが子どものためには最も良いことと考え、子どもに音声言語を押しつけて、親は応援しつつも子どもひとりに努力させる。

ろう者の両親を持つ大学教授、レナード・デイビス（Lenard J. Davis）³⁾によれば、

norm という考え方が 1840 年から 1860 年頃までに意識されるようになり、統計学が「普通」「平均」という概念をヨーロッパ文化に導入した。さらにフランスの統計学者 Quetelet(1796-1847)は身体面、精神面両方において「平均的な人間」という概念を創り出した。それによって、社会の中の格差を最小限にすることが必要だとマルクスは考えた。

筆者はこの「平均的な人間」を重視する考え方がAレーンの考え方につながると考える。Bレーンは親子が異なるコミュニケーション手段をもつ異なる人間であると考え、子どもには自然に意識することなく身につけることができる手話の環境を与え、親も一緒に手話を学び、身振り手振り、表情、雰囲気などを含めて、子どもと会話することに努力する。子どもも会話する相手に合わせて、口話、筆談、表情、動作、利用可能なあらゆる手段を身につけるようになる。

次に、もう一方のBレーンを説明する。聞こえない子どもが聞こえる親と異なる言葉を身につける場合、子どもは親から言葉を継承するのではなく、聞こえない子どもが利用できるライブコミュニケーション手段となる手話を身につけることになる。手話は聞こえる親からではなく、手話を使う「ろう者」から、つまり、ろう者たちの環境に子どもが入ることによって、手話を子どもは身につけることになる。聞こえない子どもは、聞こえる親とは異なる母語（＝手話）を身につけて、無意識に自由自在に手話を使って1人で、手話を使って完全なライブコミュニケーションができるようになる。すなわち、手話で完全なライブコミュニケーションができる人に聞こえない子どもはなるでしょう。手話によって聞こえない子どものコミュニケーション欲望は満たされるでしょう。

そして、その後、聞こえない子どもには手話で伝えあえる、ろう者仲間ができるので、友だちがないというような孤独感は感じないことでしょう。手話を使ってコミュニケーションできるなら、伝え合うことができないと思う劣等感は感じる場面は少なくなるでしょう。手話を使わない聞こえる人に対してのみ、伝え合うことができないと感じるかもしれない。しかし、聞くことが重要ではなくなるため、自分が聞こえないという障害をもつ者であるという意識も感じる事が少なくなるでしょう。日本国内で日本語以外でコミュニケーションする、たとえば、英語話者やフランス語話者が、日本語が話せないと強い劣等感を感じないと同様に、手話を使ってコミュニケーションできる人は日本語でコミュニケーションできないと強い劣等感を感じて落ち込むことはないでしょう。

A レーンと B レーンの異なる点は、親子が同じ音声言語を使うのではなく、聞こえない子どもが親とは異なる言語の手話を使うことと、言葉が親から子どもへ継承するのではなく、親子以外の手話の環境の中で親子共々に学んでいくものであることだ。このように、親は音声言語、聞こえない子どもは手話というように、親子が異なる言語を母語としていると親が認めると、親には別の苦悩が現れるでしょう。ひとつは、親子間のコミュニケーションをとるためには、親が手話を覚えなければならないことだ。2つめは、子どもは聾学校に通うことを望んだり、ろう者社会に居ることを好むようになって、聞こえる人の社会（たとえば、聞こえる子どもとの友達関係を作る、普通学校に通う）に入ることを望まなくなると、聞こえる親から子どもが離れていってしまうのではないかと不安である。しかし、親子で完全なコミュニケーションをして親子の人間関係を作ることが、子どもが人として幸せに生きていく根本になると考えれば、親も子どもと一緒に手話を覚えることを選択するはずだ。そうすることによって、子どもの心は親から離れていくことはないでしょう。

以上の2つのレーンのどちらを進むか、聞こえない子ども本人ではなく、親が聞こえない子どもが生まれた時に決断しなければならない。しかし、大多数の親が A レーンを選択している。なぜ、A レーンを選ぶかを次に説明していく。

3・1 A レーンの5つのランドマーク

聞こえない子どもが生まれたときに、目の前には進むべき道として1つではなく、2つのレーンがあると筆者は考えるが、片方のAレーンを選択する聞こえる親が多い。その理由の一つは、「聴覚障害児」と病院で診断を下

されるため、病気と同様に聴覚障害の治療を当然、親や周囲の大人は考えるからである。障害の治療として、手話を使えるようになることは含まれない。また、手話を使っている場面を日常的に多くの人が目にする事も少ないことが B レーンを選択しない理由となるだろう。さらには、専門性をもった聾学校が減少して、特別支援学校で他の障害児と共に教育を受けることになる⁴⁾ことも多くの親にとっては未知の世界に思えることだろう。

まず、A レーンを進むとそこには5つのランドマークがあると私は想像する。1つ目は生まれてすぐに聴覚障害児と診断されて「障害児」と呼ばれるようになる時、2つ目はその後、補聴器をつける時、3つ目は最近では幼児の時から手術されることが多くなった人工内耳装用手術をしたとき、4つ目は口話法の指導を受けるようになったとき、5つ目は聾学校ではなく普通学級を選択した時である。そして A レーンの最終到達目標は聞こえる人の世界に所属することだ。この5つのランドマークの順序は聴覚障害児によって異なるかもしれない、また、すべてのランドマークを聴覚障害児全員が通るといってもいい。それでは次に5つのランドマークを詳しく説明する。

3・1・1 1つ目のランドマーク：障害児

最近子どもが誕生してすぐに、「新生児聴覚スクリーニング検査」を受けることができる。眠っている新生児に 35dB の小さな音を聞かせ、その刺激に反応して起こる変化をコンピューターが判断して、音に対して正常な反応があるかを調べる聴力検査は、子どもが聞こえないと診断される補助的検査となっている。最初に我が子が聞こえない子どもであることを知らされる場所はほとんどが病院である。病院で聴力検査をして「聴覚に欠陥がある」という言葉を聞いた親は、子どもを「聴覚障害児」と見なす。このとき、ほとんどの聞こえる親は手話やろう者になじみがないので、障害児の A レーンのみが目の前に現れるだろう。聴覚に欠陥がある子どもなので、何とかして聞こえる普通の子どものようにしたいと親は願う。

「障害児」という名前のレッテルを我が子に貼り、平均的な子どもと差があるとイメージを我が子に親は持つことになる。

齋藤陽道⁵⁾の母も大病院で医師から「あなたのお子さんは耳が聞こえません。すぐに補聴器をつけて教室に通わないと、会話ができなくなります」と告げられた。

ミス・アメリカになった聴覚障がい娘、ヘザーを育てた母親の育児日記的な本では、母、ダフネ・グレイ (Daphne Gray)⁶⁾は次のように言っている。

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

病院の検査の結果、オーディオロジストによれば、**profoundly deaf**（重度の聴覚障害者）と診断された。ダブネはオーディオロジストにヘザーの将来がどうなるのかを聞かされた。「それぞれの子どもの知能や能力、訓練によるが、たいていヘザーと同程度の聴覚障害児は言葉話すことはむずかしい。だから手話を使ってコミュニケーションする。学校も聾学校に行くことが多い。しかし、学力も3年生程度までしか期待できないでしょう。だから、最終的には職業訓練を受けることが必要でしょう。」

3・1・2 2つ目のランドマーク：補聴器

聴力検査によって、子どもの聴力が数値で示される。たとえば、100dB という数字は「ろう」と呼ばれるほとんど音が聞こえない状態を示す。100dB が 50dB になったら、聴力が良くなったことになる。少しでも聴力を良くする補助的道具として補聴器がある。補聴器の進歩はめざましく、最近では小型化し、アナログがデジタル化してパソコンで聞こえ方を調整できるようになり、さまざまな場面に合わせた調整もできるようになった。親としては少しでも聞こえるようになった方がいいだろうと思い、補聴器を購入して子どもに装着させる。補聴器の値段も幅広く、かなり高額なものまであるが、障害者手帳を持っていれば、多少ではあるが補助金が出る。親は補聴器によって少しでも聞こえるようになれば、聞こえる人に近づく気がする。

障害者と見なされると、障害者手帳を与えられる（ただし、70dB 以上）。障害者への経済的支援もあり、親としては聞こえないことへの補助的器機（補聴器、FAX など）を購入するときに助かる。親は子どもを健聴児（健常者）ではないとして特別扱いする。そして、親として聞こえないという欠陥を治療しなければならぬ責任を感じる。

3・1・3 3つ目のランドマーク：人工内耳

補聴器と同じように人工内耳を子どもに装着させる親もいる。人工内耳は電極を頭の後ろに埋め込む手術が必要で、以前は保険適用でなかったのが3百万以上の高額な費用がかかった。しかし、現在は保険適用となり、さらには、手術が可能な年齢が2歳以下まで下がった。そのため、親が2歳の子どもの意思を聞くこともなく、親の判断で人工内耳装用手術を行う場合も多い。人工内耳も補聴器と同様に、少しでも聞こえるようにするためのものだが、補聴器と違う点は、本人が勝手に人工内耳をとりはずすことはできない。補聴器は眼鏡のように、本人が身につける・つけないはできるが、人工内耳は一旦、手術すると、自分でとりはずすことはできない。

オーストラリアの人工内耳開発製造会社 Cochlear Ltd. の東京オフィスが1989年に日本に開設された。その日本コクレア社によれば、2014年、人工内耳の装用者数は日本を含む諸外国で推定25万人、日本の装用者数は約1万人程度とされており、日本の装用者数は世界4位である。

また、森尚彰⁷⁾によれば、人工内耳装用児の数の増加に伴って、小中学生の人工内耳装用児の71%が通常学級に在籍しており、京都大学医学部付属病院で人工内耳埋め込み手術を実施した人工内耳装用児においても小中学生の55%は通常学級に在籍し、2011年度以降の小学校就学時では、約70%が通常学級児就学し、通常学級へのインテグレートが増加している。

多くの人工内耳装用児が通常学級に通学している。彼らはパソコン・あるいは手書きの字幕や筆談などのサポートを受けて頑張っている。彼らは障害児であって、サポートをほぼいつも必要としていて、自分一人でサポートなしで授業を受けるような自立した行動をなかなかとりたくてもとれない。

3・1・4 4つ目のランドマーク：口話法

以前の聾教育（主に聾学校での聞こえない子どもへの教育）で手話と口話法の2つが教育方法としてあった。しかし、19世紀後半から世界各地で口話法が多くなっていった。理由の一つは補聴器、さらには現代の人工内耳装用者が増えたことであろう。つまり、補聴器や人工内耳で、少しでも聞こえるようになって、聞こえる人の世界に子どもを所属させたいという親の願いが、音声言語を発音する人の口の形を見て、言葉を「聞こう」とする口唇法を望んだ。さらに、発音する口の形や息の出し方をまねして覚えて声を出して発音する方法を学んで、言葉が話せるようになってほしいと考えた。子どもが聞こえる人の社会に参加することを目指すためには、音声言語をできるだけ習得しなければならないと親は考える。その結果、少しでも聴力が良くなれば口話法で音声言語を聞く・話すことができるようになると親は予想したであろう。斎藤⁸⁾は以下の状況に陥っていた。

自分の声は、口から出した瞬間に消えてしまう。聴者にどんなふうが届くかもわからないまま発した音声のゆくえを、相手の表情から読み取る。そんなふうに関心の顔色をうかがいながら、自分の声の良し悪しを確かめていた。そして聞くときは耳と目をそばだてて、ノイズ混じりの音の中から、うごめく口の形を手がかりにして、その人の話を予想する。それがぼくにとっての会話だった。なんてことないはずの話ですら困難だった。それでも、「音声と話せなければ、聞こえなければ、一人前じゃない」という呪縛ゆえに、霧散する音声をつかまえようとして頑張っていた。

神経はすり減るばかりだった。

3・1・5 5つ目のランドマーク：普通学級

聞こえる親は自分の聞こえない子どもが将来的には聞こえる人の社会で聞こえる子どもと同様に、普通に暮らしてほしいと願う。音声言語が不完全でも聞いて話せるようになれば、普通学級に所属して普通の子として成長してほしいと願う。普通学級に所属できれば、子どもは聴覚障害児ではなく、健常児に近づいていることを意味すると親は考えるだろう。また、普通学級に所属することは音声言語を聞く・話す機会が増えるので、口話法の訓練にも役立ち、聞こえる子どもの友達もできるだろうと考えられる。

斎藤⁹⁾は普通学級に通っていた頃について、聞こえる子どもの仲間入りできるような状態ではなかったことを書いている。

普通学校に通っていた中学生の時はいよいよ心身ともに限界で、朝からからだが重く、やる気もなかった。でも、まともに話せない自分に未来があるとは到底思えず、考えることも面倒くさかった。親に反抗することもだるかったので、全部の気持ちにフタをして目立たないようにするため、惰性で学校に通っていた。

相手の声を予想しながら、その答えにふさわしい言葉を、できるかぎり言いやすく、伝わりやすい発音に変換して言う。そんな、ことばとことばが噛み合う実感のともなわないやりとりが、ろう学校に入学して手話に出会うまでの会話のすべてだった。

ダフネ¹⁰⁾はヘザーを普通学級に入れようとしたが、学校側からはヘザーの言語力が足りないことを理由として入学許可されなかった。ヘザーの言語力を調査したところ、基本使用語彙数は225~250語であった。一方、普通の6歳児の平均語彙数は2500語であり、ヘザーの約十倍だった。そこで、母ダフネは学校側に母親が1年間、仕事を離れてヘザーの専属家庭教師としてサポートすることを提案し、学校側がこの提案に同意してヘザーを学校に受け入れた。2年生になっても家庭では次の日にヘザーが勉強するところを先生から聞いておいて、予習をし、授業の後に復習をするという、ヘザーの家庭教師もダフネは続けた。ダフネ¹¹⁾は言う。

「私が手話を習わず、家族にも習わせなかった一番大きな理由は、あなたにとって口で話す事の法がずっと難しかったからよ。あなたが生まれてからずっと、私たち家族は全員でああなたの言葉の訓練のコーチ兼パートナーをつとめ

てきた。あなたの最も近くにいる人間が手話を覚えてしまえば、コミュニケーションは楽になるかもしれないけれど、あなたは継続して強制的に言葉によるコミュニケーションを練習させられる場はなくなってしまふ。それだけは困ると思ったのよ。

4. 手話者の世界を目指すBレーン

このようなAレーンに対して、障害児と見なすこともしないで親子ともども手話を使うBレーンが想像される。聞こえない親に聞こえない子どもが生まれた時は、聞こえない親が手話を使っている場合はほとんどBレーンを選択するであろうが、手話を知らない聞こえる親がBレーンを選択することは少ないであろう。

4・1 聞こえる人とは手話通訳で会話する

聞こえない親に聞こえない子どもが生まれたとき、自分と同じ手話を使うBレーンを選択することが多いであろう。手話を使えるようにするだけなので、このレーンは日本語の習得のように言語習得にのみ努力するレーンとなる。目指すは手話者の世界であって、手話者になるまでにかかる時間は、それぞれ聞こえない子ども一人一人の努力によって異なるだろうが、日本語を話す聞こえる子どもたち全員が完璧な日本語話者になるとしたら、聞こえない子ども全員が、完璧な手話者になるはずだ。

まず初めに、手話を母語とする「ろう者」の手話を見る環境に聞こえない子を置くことがスタートになる。子どもは周りの手話を見てまねをして身につけていく。そして、赤ちゃん言葉から始まり、話し言葉を覚えて、次に文字を習得する努力をする音声言語の発達過程と同様に、聞こえない子どもは手話で会話するようになる。途中のランドマークとしては、手話での教育を受けることができる聾学校に入学するだろう。また、聞こえるようになるための器機を装用する代わりに、いつでも手話で会話できるように、聞こえる人との会話には手話通訳を利用するだろう。私たちが知らない外国語に通訳をつけるように、手話を使う聞こえない子どもは手話通訳者や、手話通訳の器機を要請するということである。

斎藤¹²⁾は聾学校に転校して手話と出会った。その時から「こころと結びついたものとして、ことばを発することができるようになった」と書いている。その平仮名で表記されている「ことば」で、「たわいない会話はとろりとした蜂蜜のように、とても甘くやわらかいものでもあった。やわらかいことばは、固く四角い意味あることばが積み重なった会話のすきまやひび割れに、つるり、ぬ

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

るり、浸透していく。」と手話を表している。

言語によって心を通わすことができる。山地彪¹³⁾は手話によって家族と聾者仲間とところを通わすことができ、それが基盤、心の糧となり、技術を身につけて、運転免許を取り、聞こえる人の社会で位置付いた。ライブコミュニケーションする言葉によって、人間関係を築く。ライブコミュニケーションできる言葉とは、その人が体の利用可能な部分を使って、コミュニケーションするコミュニケーションツールである。聞こえない人は耳以外を使ってコミュニケーションする手話でライブコミュニケーションできる。文字ではない。文字はその言葉の空気が伝えられない。

4・2 不完全なコミュニケーションのAレーンと完全なコミュニケーションBレーン

多くの聞こえない子どもの親は、子どもが聞こえないという欠陥を持たない普通の子どものように近づいて、聞こえる人の社会に所属するようになることが、子どもの幸せだと考えた。そして、以上のように障害児としてのAレーンを進むことになるのであろう。聞こえないことを問題として、聞こえる人の社会に参加できるほどの聞こえる人になることを目標とした。一方、Bレーンを選択した親は、聞こえない子どもが習得困難な音声言語の代わりに、利用可能なコミュニケーション手段である手話でコミュニケーションできないことを問題とした。そして、手話でコミュニケーションできるようになることを目指した。

たしかに子どもの幸せを願って、親はAレーンを選択したが、なぜ、手話のBレーンを選択しないでAレーンを多くの親が選択するのか。手話のBレーンの存在を知っても、なぜ、Aレーンを選択するのか。聞こえないことを問題として、コミュニケーションできないことを問題としなかったのはなぜなのか。少しでも聞こえるようになれば、音声言語でコミュニケーションできると考えるのであろうが、聞こえる人と同様な何不自由ない話し言葉のライブコミュニケーションはむずかしいと考えられる。また、Aレーンを選択した理由は、親と子は同じであるものだという思いを前提にして、親子は同じ言葉で、同じコミュニケーション手段で伝え合うことを当然と思う、聞こえる親が大半であるからであろう。聞こえる親だから、子どもも同じ聞こえる人の社会で、同じ音声言語でコミュニケーションすることが当然なので、Aレーンを選択したとも言える。斎藤¹⁴⁾もAレーンを進む苦悩を次のように書いている。

小さい頃に受けた厳しい発音訓練のおかげで、それなり

にキレイだとまわりからほめられる程度には、ぼくの発音はよいものらしい。しかし、ようやく身につけた発音も、ひとたび聴者社会に出ると、ほとんど通じなかった。「ん？」という初対面の聴者のげげんな顔を何百、何千見てきただろう。

それでも、なぜ、聞こえる親は手話を選択しないでAレーンを選択したのか。Bレーンでは子どもは手話を習得することで、完全なコミュニケーションをすることができるようになる。しかし、Aレーンでは、子どもは努力をしても全員が音声言語を使ったコミュニケーションに苦労しないほどの完全なコミュニケーションができるようになるとは言えない。Bレーンを選択すれば、完全なコミュニケーションができるようになるのに、なぜ、不完全なコミュニケーションしかできないAレーンを親は選択するのか。なぜ、Bレーンを選択しないのか。

筆者が考える要因の1つは聞こえる親の心理である。聞こえる親は「自分の知らない世界の手話」に不安を感じ、あるいは、「他人と同じではなく、他人と異なる」という事への恐怖感のためにAレーンを選択するのではないかと考える。

5. 聞こえる親の恐怖感と期待感

5・1 Aレーンを選んだ理由：恐怖

5・1・1 聞こえない人の社会、少数派への不安

親にとって子どもは家族というグループのメンバーの一人である。たとえば、日本人の家族は、日本語という同じ言葉を使って、日本的な同じ考え方を持つメンバーの集まりであることを当たり前とすると、子どもが手話を使う場合、異なる言葉を使って異なる考え方をするようになると思える。つまり、それは家族から子どもが精神的に離れていく気がする。親にとって、子どもが大人になって親離れしていくのは当然だとしても、幼い頃から異なる言葉を使う、まるで外国人が家庭内にいるような気持ちにさせる子どもになってしまうことは親としては耐えられない。

さらに、手話を使うようになると聾学校に行く可能性が高くなり、手話で教育する聾学校に行くと、親は子どもだけが、ろう者社会（ろう者コミュニティー）に行ってしまう気がする。以前には多くの聾学校は寄宿制だったので、子どもが長期の休みしか家に帰らなくなって、親から離れてしまうことをおそれていたであろう。都築繁幸¹⁵⁾によれば、アメリカでは電話の発明者、アレキサンダー・グラハム・ベルが寄宿舎の聾学校は閉鎖すべきであり、聴覚障害者の教師を失職させ、手話の使用をや

めるべきであると提案した。寄宿制聾学校に子どもを入れると、離ればなれで暮らさなければいけないという親のつらい気持ちを理解しての提言であると言って、毎日通うことができる通学制学校を作ることを進めた。

ヘザーが聾学校に自分も行くべきではないかと言った時に、ダフネ¹⁶⁾は「それは違うわ、ヘザー、あなたは聾学校には行かなくてもいいの。あなたは普通の学校に通ってお姉ちゃんたちとお父さんとお母さんと一緒に暮らすのよ。あなたが遠くの聾学校にいつてしまうようなことになったら、お母さん悲しいわ」と言って、ヘザーがろう者コミュニティに接触することを拒んでいる。

次に、少数派であるろう者社会に対して親が不安を感じるのは、子どもの将来を考えるからであろう。親は自分が生きている間は、子どもを保護して支援し続けることができるが、親が亡くなったあと、子どもが誰の助けを得て生きていけるかを考えると、手話を使う「ろう者社会」に子どもが所属することで、聞こえる人が所属する多数派社会の助けを得られにくくなるのではないかと不安以上に恐怖さえ感じるようになるであろう。なぜなら、子どもが聴覚障害者として、障害者支援を受けている限り、親の死後も子どもは支援を受けて生きていけると思えるからだ。親の死後だけでなく、教育を受けるときにも音声言語の字幕や筆記の支援（要約筆記のサポート）を受けることができる。もちろん、手話通訳も要請できるが、いつでもどこでもほとんど誰もが音声言語の文字を使って、聞こえる人が支援してくれる。

一方、手話を使った授業を受けることや、手話通訳がつく授業を受けることができるのは一般的ではない。少数の聾学校に限られるとも言える。日本にはアメリカのギャロデット大学(Gallaudet University)¹⁷⁾のような手話で授業をする大きな総合大学はない。日本には唯一、視覚障害者と聴覚障害者のための高等教育機関として筑波技術大学¹⁸⁾があるだけだ。ましてや一般の高校・大学に進学できるほどの学力をもつ聞こえない人に育つ可能性が聾学校では少ない現状がある。

5・1・2 手話への不安、不信

最近まで手話は言語であると法律で認められていなかった。日本でも 2011 年「改正障害者基本法」で言語として手話を見なしたばかりである。「改正障害者基本法案」が 2011 年 7 月 29 日、参議院本会議において全会一致で可決、成立し、8 月 5 日に公布された。

他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに、情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること。

今なお、一般的には手話が言語と認められていない社会で、親は子どもに手話を勧める気にはならなかった。そして、一般的ではない手話では、多数派の聞こえる人とコミュニケーションができないことも、子どもに手話を勧めない理由となったであろう。

5・2 A レーンを選んだ理由：医学、科学への期待

A レーンを目指すところは聞こえる人の社会であるので、A レーンを選んだ親たちは子どもが少しでも聞こえるようになって、聞こえる人の社会に参加して生きていけるようになってほしいと願っている。そのために、聴力を少しでもよくする手段に期待をかける。特に、補聴器や人工内耳には大きな期待を寄せる。なぜなら、聞こえる人にとって、補聴器や人工内耳は眼鏡のようなものと考えからであろう。視力が落ちたとき、私たちは眼鏡をかけることで 1.0 に近い数値にすることができる。では、聴力はどうかというと、たしかに 100dB が補聴器や人工内耳によって 50dB になることもある。この数値の変化が親には聞こえるようになってきていると思わせる。だから、このような期待感が A レーンを選ぶ要因のひとつになるであろう。

しかし、現在の時点では、補聴器を使っても人工内耳を装着しても、100%、完璧に聞こえる人にはなれない。聞こえる人とは、それほど意識しなくても完ぺきに母語（音声言語）を聞き取ることができる人を意味するなら、聞こえない子どもは完ぺきに音声言語を聞き取ることができなくなれば、完ぺきに聞こえる人にはなれない。また、人工内耳をつけた後の訓練や、口話法は本人の努力によって成果は異なるので、A レーンを進む聞こえない子ども全員が聞こえる人の社会に完璧に参加できるほどになるとは言えない。

マイケル・コロスト(Michael Chorost)¹⁷⁾は人工内耳装用手術を受けて自分をサイボーグと呼び、人工内耳によって聞こえる人になっていないことを意味している。コロスト氏はサイボーグと自分を位置づけて、聴者社会に所属できない自分から見た手話コミュニティをうらやましく思っている。

耳が聞こえないことが不幸ではなく、ちょっと不便なことにすぎなくなったのだから、うれし涙くらい流したっていいだろう。だが、同時にぼくは手話コミュニティが

第 3 条（地域における共生等）

三 全て障害者は、可能な限り、言語（手話を含む。）そ

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

うらやましくもあった。どこかのコミュニティに自分の居場所を見つけることを心から願っていたぼくにとって、人々が団結し、助け合う手話コミュニティはとても魅力的だった。

以上のように、A レーンを進む子どもの成功は、補聴器、人工内耳、口話法、普通学級などのランドマークを聞こえない子ども本人が努力して通過して進もうとする頑張りにかかっているため、全員が挫折することなく、レーンを進み続けることができるとは言えない。このことが、A レーンを進み続ける聞こえない子どもが聞こえる人の社会に完璧に参加できるようにならないのではないかと心配を残すことになる。

ところで、Aレーン・Bレーンのどちらを選択して進むかは聞こえない子どもが生まれたとき、本人が選択したのではなく、親が選択したレーンであるため、本人はどう思っているのだろうか。聞こえない子どもの本心はどんなであろうか。

6. 聞こえない子どもの本心

6・1 Aレーンを進む子どもの本心

6・1・1 障害者として努力

聞こえない子どもは、「自分は聞こえないんだ、自分は障害児だ」と思わなければならない。自分では聞く体験をしたことがないので「聞く・聞こえない」とはどういうことか、わからないだろうが、「あなたは聞こえないのよ、普通の子ではなく、障害児なのよ、だから特別扱いされなければいけないのよ」と知らされることになるだろう。聞こえない子どもは、耳の中に異物が入るように思える補聴器をつけて、何度も調節してもらいながら、補聴器に慣れるように努力しなければならない。人工内耳は痛い思いをする装用手術を受けなければならない。手術後からは人工内耳を使って聞く訓練を根気よく続けなければならない。補聴器や人工内耳を利用して、他人の話を書くときは、いつも頑張って聞こうとしなければならない。はっきりと正確に聞こえないときは、前後の聞こえた単語から予想して、話された内容を考えなければならない。話す訓練も口の形を見て、舌の動きを見て、紙が揺れるのを見て息のはきかたを覚える。このように、聞こえない子どもは、いつも大変な努力をしなければならない。

6・1・2 親を思う努力

しかし、これほどの努力にもかかわらず、聞こえる人と同様の完璧なコミュニケーションができない。聞こえ

る人の話す言葉を無意識に聞き取ることができない。現代の医学や科学技術を使っても、聞こえない状態を完璧に聞こえる状態に変えることはできない。補聴器も人工内耳も聴力を少し、良くするだけであって、聞こえない人を聞こえる人に変えることはできない。

聞こえない状態には伝音性難聴と感音性難聴がある。しかし、両者の違いを十分に理解することなく、補聴器や人工内耳によって、両方の難聴が改善することが根本的解決法と考えて期待しがちだ。伝音性は高齢者になると耳が聞こえにくくなる状態に近い。伝音性ではどの音も（たとえば高音、中音、低音）すべて聞きにくくなるので、聞こえのグラフで表すと、低い音から高い音までまっすぐの線になる。この場合、補聴器をつけると低い音でも高い音でもすべて多少は聞き取りやすくなるため、言葉も虫食い状態の文ではない。一方、感音性では、たとえば、高い音だけが全く聞こえないが、低い音は聞こえる場合、聞こえのグラフで表すと斜めの線になる。すると、高い音の言葉（子音）が聞こえないので、虫食い状態の文を聞くことになり、言葉の聞き取りはむずかしくなる。生まれつきの難聴児は感音性難聴が多いので、その聞こえない子どもは補聴器や人工内耳を利用して、虫食い状態の文を聞いていることになる。しかし、聴力が良くなったとしても、多少虫食いが少ない虫食い文を聞いているので、聞き取った虫食いの不完全な文を、予想して完全な文にする作業をする。つまり、聞こえない子どもがしなければならない努力はさほど、変わらないだろう。

聞こえる親は将来の子どもの姿を夢見る。彼らの思う子どもの姿は聞こえる子どもの姿であろう。他の子どもと異なる子どもの姿に恐怖心や不安感がある。我が子の幸せを考える親の気持ちを思うと、聞こえない子どもはいやいやながら努力を続けることになるのだろう。ここに、本心を表さない聞こえない子どもの姿が見える。

6・1・3 劣等感・孤独感・

以上の状態の聞こえない子どもは不完全なコミュニケーションしかできない自分に対して、劣等感をもつであろう。努力し続けなければならないことをつらく思うこともあるであろう。不完全なコミュニケーションしかできないために、友だち関係も作りやすく、自分から積極的にコミュニケーションしようと思わなくなり、次第に孤立する状態になるであろう。他人と完璧なコミュニケーションをして、心を通わすことができないために孤独感を感じる。また、相手とコミュニケーションできても、相手がゆっくり話す、あるいは口の形をはっきりさせて話すなど、支援があるからコミュニケーションできるのであって、その支援を必要とする自分を情けなく思

い、コミュニケーションするときは他人に依存していて自立できないことを悔しく思うかもしれない。

6・1・4 自由自在に無意識に使う会話言語

たとえ、受け答えがうまくできていても、表面的なコミュニケーションになってしまい、うすっぺらな人間関係しか生まれない。私たちは言葉を自由自在に無意識に使いこなすので、感情がむき出しになる口げんかができる。しかし、自由自在に無意識に使いこなせない言語では、けんかするほどの深い人間関係が生まれない。つまり、聞こえない子どもが本当に困ったなあ、問題だなあと思っていることは、自由自在に無意識に使いこなせるようなことば(=母語あるいは第一言語)をもっていないことである。私たち聞こえる人は、母語を自由自在に無意識に使えることを当たり前としているので、当たり前前のことに疑問をもたない。だから、聞こえない子どもが自由自在に無意識に使いこなせることばをもっていないことに気づかない。また、私たちはコミュニケーション手段やコミュニケーション(会話)という言葉が頻繁に使うにもかかわらず、あまり、深く考えたことがないのではないかと。私たちは誕生するとすぐに呼吸し始め、一生、ほとんど無意識に呼吸し続ける。もし、私たちが呼吸するたびに、意識して呼吸しなければならない状態になったら、どうだろうか。聞こえない子どもが意識して音声言語で会話する状態と似ていると思えないだろうか。聞こえない子どもが意識して呼吸しなければならない状態を無意識に呼吸できるようにしなければ、子どもの頑張る気持ちがなくなって生きていけなくなってしまうかもしれない。

母語とは、親と暮らしながら聞き覚えた音声言語だけでなく、環境の中でライブコミュニケーションする(直接、面と向かって会話する)無意識に身につけたコミュニケーション手段を示すのではないかと。そう考えると、聞こえない子どものライブコミュニケーション手段は音声言語ではない。

6・1・4 伝えにくい子どもの本心

親は聞こえないことを問題としていたが、聞こえない子ども本人はコミュニケーションを問題としていた。しかし、子どもは親に自分の本心を伝えにくい。なぜなら、子どものことを考える親の気持ちはよくわかるから、そして、聞こえない子どものことを考えてくれる周囲の人たちの気持ちがよくわかるから、自分の本心はなかなか、口に出せない。

また、周囲の人たち(先生、友だち)に対しても、自

立したいから支援してくれることをやめてくれとは言えない。人々は弱者に対して優しさを表してくれているのだから。さらには、社会的支援(たとえば、障害者への経済的支援)も不必要とは言えず、最初のスタート地点となる、「障害者である、弱者である」ことを強く否定することはできない。

Aレーンを進む聞こえない子どもが、自由自在に手話を使ってコミュニケーションしている人たちを見たとき、彼らをうらやましく思うだろう。実際に、人工内耳をつけたマイケル・コロスト²⁰⁾は、手話を使う人をうらやましいと言っている。

ぼくは手話コミュニティがうらやましくもあつた。どこかのコミュニティに自分の居場所を見つけることを心から願っていたぼくにとって、人々が団結し、助け合う手話コミュニティはとても魅力的だった。ひと言でいえば、手話コミュニティには、現代社会が失った「温もり」がある。アメリカ人は裕福だが、孤独だ。手話コミュニティの温もりは、そのまま現代アメリカ文明への警鐘となり、より人間らしい文明への夢をかきたてる。

彼は「自分も手話を使えば、こんな大変な努力をしなくていられるのに」と本能的に思いながら、「いや、努力して音声言語を使えるようになった方がいいんだ」と自分に思いこませているのではないかと。なぜなら、親や周囲の人に逆らうことはできないからでもあるだろう。

ダフネ¹⁹⁾もヘザーのためだと思って、手話を避けて口話を強制してきた。

「私が手話を習わず、家族にも習わせなかった一番大きな理由は、あなたにとって口で話すことのほうがずっと難しかったからよ。あなたが生まれてからずっと、私たち家族は全員で、あなたの言葉の訓練のコーチ兼パートナーをつとめてきた。あなたの最も近くにいる人間が手話を覚えてしまえば、コミュニケーションは楽になるかもしれないけれど、あなたに継続して強制的に言葉によるコミュニケーションを練習させられる場はなくなってしまふ。それだけは困ると思ったのよ」

6・2 Bレーンを進む子どもの本心

Bレーンを選択する親の大半が聞こえない親であるので、聞こえない子どもは家庭で手話を見て身につけていく。あるいは、デフ・ファミリーでなくても、聞こえない子どもを手話の環境に入れた場合は、聞こえない子どもは手話を自然に身につける。

手話は聞こえない子どもを持つ聞こえる親を救う

タイトル *Deaf in America*²⁰⁾ の中では、デフ・ファミリーの聞こえない子どもが、初めて自分とは違う聞こえる人を知ったとき、聞こえる人は手話が使えずなくて不便だろうなと思ったと書かれている。たとえば、声が届かないほど遠くの人にも手話では伝えられるという長所を持っている。手話を使う聞こえない子どもは、聞こえる人と比べて自分は劣っているとは思っていないことがわかる。

手話を使ってコミュニケーションできる親や周囲の人たちがいる場合、聞こえない子どもは孤独感を感じない。手話でコミュニケーションするときに、誰かに助けをもらう必要がないので、自立している。手話でコミュニケーションすれば、親とも友だちともコミュニケーションできて、強い親子関係や友人関係も生まれる。彼らは手話で自由自在に無意識にコミュニケーションできるようになる。そして、彼らはコミュニケーション手段が手話であることが一般の子どもと異なっているだけで、その他の点では全く、一般的な発達成長過程をたどる。斎藤²³⁾によれば、妻のまなみはデフファミリー出身なので斎藤本人（はるみち）とは異なる。

「私は、はるみちさんほど音にこだわりがなくて。最初から『音がない』からね。両親と話すときも手話だし、聾学校育ちだから、『聞こえていない』という自覚もなかった。だからもともと、わたしは自分のことをく見るひと>って思っているの。はるみちさんは二十歳のとき、補聴器をつけるのをやめてからく見るひと>になったんだよね。そこは全然ちがうね。わたしたち。」

7. まとめ：聞こえない子どもの幸せは完全なコミュニケーションができること。

筆者の難聴の娘が次のように言った。

「虫って鳴くの？鈴虫はリーンリーンとか、そんな小さい音聞こえるの？すごいね。特技だね」

「補聴器の音量を上げると、周りの全部の音が大きくなるから、やかましいよ。でも、聞こえる人の耳は、どうなの？へえー、聞きたい音以外は自然に小さくできるの！すごいね。すごい耳してるね」

これらの言葉は、聞こえる人と聞こえない人の見方・考え方が異なることを表す。聞こえる人は、耳が聞こえないことを欠損や欠陥として「100%の自分よりマイナス」のイメージでとらえる。ところが、聞こえない人は、耳が聞こえることを特技として「100%の自分よりプラス」のイメージでとらえていた。聞こえないことに対して両

者の見方が異なる。聞こえない人は、自分は100%の完璧・完全な人間であると考えているのに対して、聞こえる人は、自分は100%の完璧・完全な人間であるが、聞こえない人は聞こえないというマイナスがあるから完璧・完全ではないと考えていることがわかる。それに対して、斎藤²⁴⁾は赤ん坊を「無力であるが、完璧」と見ている。この見方は親の聞こえない子どもに対する見方を変える。

聞こえる親の聞こえない子どもは、ときどき、親と自分の考え方が違うことに気づき、親に自分の考え方を分かってもらおうと思うが、親は考え方が違うことに気づいてくれないので、わかりあえない。そして親子がわかりあえないから、子ども側から「もう、わかってもらえないから」と親子関係が壊れたままにしておく。そんな場合も親は子どもと分かりあっていないこと、そして、子どもが自ら、親子関係をこわしたことに気づきにくい。

なぜ、聞こえる親はこのような子どもがわかってもらえないと思っている本心に気づかないのだろうか。それは親に危機感がないからではないか。人間は分かりあって、人間関係を築いていかなければ生きていけない、社会で生きていくためには人間関係を築かなければならないことを心底から親が知っていないから、我が子は人間関係ができないようになったら生きていけないんだという危機感が持てないのだろう。もうひとつは、多数派の考えが物事を判断する尺度の基準であるからではないか。物事を判断するときに、数多くの異なる物事を経験していない場合、たとえば、ほとんどが日本人で外国人が少ない日本社会や日本の地域では、日本人的思考のみが物事の判断基準となつて、いくつかの異なる考え方が現れない。ところが、もし、日本社会でさまざまな国籍や人種の人たちが暮らすようになったら、物事の判断基準は一つの同じ考え方にはならないであろう。異文化コミュニケーション、異文化理解と言われるように、異なる物事を経験することで、「同じでなければ村八分になる」のような同じであることを重視する考え方から「同じでなくてもいい」という考え方に変わらなければならない。

2016年度愛知県の人権啓発ポスターの標語²⁵⁾は『わたしの「ふつう」と、あなたの「ふつう」はちがう。それを、わたしたちの「ふつう」にしよう。』である。聞こえることが「ふつう」である親と聞こえないことが「ふつう」である子どもの親子の「ふつう」は異なる。その異なることを親は当たり前と思うことが普通の親子関係を築くスタート地点となることだろう。

親は子どもの幸せを願っている。聞こえない子どもの本心を知り、子どもが幸せな気持ちになれるようにしなければならぬ。したがって、聞こえない子どもの幸せを願う親は、子どもが完全なコミュニケーションをすることができるようにする。たとえば、聞こえない子ど

もは耳が聞こえることを「欠陥」ではなく「特技」と思っているような、子どもの異なる考え方を知って、異なる母語を持つ親子がわかりあうことによって、聞こえない子どもは劣等感も孤独感も感じないで、自立して生きることができる。そして、親子がコミュニケーションをして良い親子関係を築くことは、子どもが将来、社会でコミュニケーションをして良い人間関係を築いていくことにつながる。

見方を変えると、B レーンが目指す手話でコミュニケーションする世界はA レーンがめざす聞こえる人の多数派社会より広い。なぜなら、B レーンが目指す到達点は、コミュニケーションするすべての人間の社会であるからである。すべての人間は、聞こえる人も聞こえない人も「コミュニケーションする人」である。この世界には日本語・英語などの音声言語、点字、手話、絵文字、文字、身振り手振りなど、いろいろなコミュニケーション手段を持つ人がいる。斎藤²⁶⁾はあとがきで次のように書いている。

「異なり」は、勝ち負けを決めたり、同一化を求めめるためにあるのではない。異なりの溝はそのままに、そこを越えて交わろうとするとところから、知恵や覚悟が生まれる。

聞こえない子どもは将来、「聞こえる人」にならなくても「コミュニケーションする人」になればいいと筆者は考える。聞こえる親は聞こえない子どもと会話して、聞こえない子どもを「コミュニケーションする人」に育てる責任があるのではないか。

参考文献

- 1) 最近ではパソコンに音声入力して文字に変換してパソコン画面やスクリーンに映す。
- 2) 聴者が聞いた内容を要約して表示する。手書きの要約筆記とパソコンによる要約筆記がある)
- 3) Lenard J. Davis, "Constructing Normalcy; The Bell Curve, the Novel, and the Invention of the Disabled Body in the 19th Century," *The Disability Studies Reader, Second Edition*, pp3-16. 2006.
- 4) 文科省、文部科学統計要覧(平成 30 年版)によれば、2006 年までは百校ほどあった聾学校が、特別支援学校に併合されて、2015 年には 1,114 校の特別支援学校中、118 校に聴覚障害の生徒が含まれている。
- 5) 斎藤陽道: 異なり記念日, p.52, 医学書院, 東京, 2018.
- 6) ダフネ・グレイ著, 監修 高村真理子: ミス・アメリカは聞こえない, pp.56-57, 径書房, 東京, 2000.
- 7) 森尚彫: 日本における人工内耳の現状, 保健医療学雑誌, 6(1), 保健医療学学会, p.21, 2015.
- 8) 斎藤陽道, p.85.
- 9) 同上, pp.85-86.
- 10) ダフネ・グレイ, pp. 108-116.
- 11) 同上, pp.227-228.
- 12) 斎藤陽道, pp.87-88.
- 13) 大杉豊: 聾に生きる 海を渡ったろう者 山地彪の生活史, 全日本ろうあ連盟出版局, 東京, 2005.
- 14) 斎藤陽道, p.18.
- 15) 都築繁幸: アメリカ聴覚障害児教育におけるトータル・コミュニケーションの発展過程に関する一考察, 愛知教育大学研究報告, 55, pp.19-2, 2006.
- 16) ダフネ・グレイ, p.126.
- 17) ギャロデット大学は 1864 年、創立されたワシントン D.C.にある私立大学で、大学内のコミュニケーション手段はアメリカ手話と書記英語である。
- 18) 筑波技術大学は視覚障害者と聴覚障害者のための大学である。
- 19) マイケル・コロスト著 椿正晴 訳: サイボーグとして生きる, p.194, ソフトバンククリエイティブ株式会社, 東京, 2006.
- 20) 同上, p.194.
- 21) ダフネ, pp.227-228.
- 22) キャロル・パッデン/トム・ハンフリーズ著 森壮也/森亜美 訳: ろう文化案内 (*Deaf in America*), pp.15-16, 晶文社, 東京, 2003.
- 23) 斎藤, p.56.
- 24) 同上, p.20.
- 25) 毎年、12月4日から10日の「人権週間」に愛知県では県民に人権について関心を高め、人権尊重の理念について正しい理解を深めてもらうことを目的として毎年、人権啓発ポスターを作成して広く配布するとともに、マスメディア等を利用した広報啓発事業を実施している。
- 26) 斎藤, p.228.

(受理 平成 31 年 3 月 9 日)